２００８年１２月９日

人間科学研究科長殿

白神　敬介氏　博士学位申請論文審査報告書

下記の審査委員会は、白神敬介氏の学位申請論文について、人間科学研究科の委嘱を受けて審査をしてきましたが、２００８年１２月２日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

記

１．申請者氏名　　白神　敬介

２．論文題名　　乳児の歩行発達への生態学的アプローチ

３．本文

（ａ）主旨

本論文は、位置移動行動の発達を「つかまり歩き」という観点から研究したものである。従来における個体行動としての歩行の発達研究と違い、子どもを取り巻く家庭環境を積極的に視野に入れ、環境事物と子どもとの相互作用という観点から歩行の発達をとりあげている。そして、それを導入する親の育児観やその背後にある文化までを考察の対象としている。

（ｂ）概要

第１章では、十分な文献調査をもとにして、本研究の問題と目的が論じられている。まず、初期の歩行発達研究が成熟説を背景として歩行の段階的発達の様相を記述することをめざし、その後知覚、認知、学習、生体力学といった観点から発達プロセスにおける多様性や個人差が論じられたが、いずれも歩行を個体能力の発達として捉えているにすぎず、乳児が生活している環境からは切り離された文脈において取り上げられてきたことが指摘されている。

そのような問題意識から、歩行発達現象をヒトやモノなどの環境との相互作用として捉えるという本研究の独自な視点が掲げられた。さらに乳児の独立二足歩行の獲得が乳児期の大きな達成指標であることに鑑み、歩行発達を養育者の意識や文化的道具などにかたどられた重層的な現象として位置づけ、Bronfenbrenner の生態学的システム論を下敷きに、対人的相互行為のみならず価値観・歴史・文化といったより大きなステムにおいて、歩行発達現象を理解することの意義がうたわれている。

第２章では、乳児の歩行発達現象のマイクロシステムとして、モノやヒトとの相互作用において歩行発達が検討されている。研究１では、モノを補助として利用しながら移動を行う「つかまり歩き」に注目して、４人の乳児を観察対象とし、家庭での自然観察を行った。つかまり歩き形態の発達プロセスの検討から、把持形態においては重力方向への荷重に対応する四足歩行型から前部方向への荷重とモノの操作に対応する二足歩行型への推移が示された。また、つかまり歩きの動作には左右差が見られ、上肢と下肢の協調がつかまり歩きの習熟に大きな役割を果たしていることなどが示唆された。

研究２では、歩行発達におけるヒト環境について取り上げられている。母親が子どもの歩行を誘導しようとする働きかけを「歩行発達援助行動」とし、その分類と有効性が検討された。研究１の観察データをもとに抽出された 154 の援助行動場面から、歩行発達援助行動として 13 の方略が抽出され、それらは子どもへの働きかけ方から「非身体接触」「姿勢変化」「歩行誘導」の三つに大きく分類された。子どもを正面から支えて歩かせようとする働きかけは効果的ではなく、対照的に、背後から支えて歩かせようとする働きかけは有効であること、母親が子どもの意図をうまく汲み取りながら適宜対応することが歩行発達援助行動の成否に重要であることが指摘された。

研究３では、研究２の知見を踏まえ、子どもの歩行発達と母親の行動傾向との関連が、乳幼児期の子どもをもつ母親を対象とした質問紙調査によって調べられた。その結果、「背後から子どもを支えて歩かせる」、「遠くのモノや場所への移動を促す」、あるいは家庭環境の工夫をおこなうといった母親の働きかけが、子どものひとり歩き獲得に影響を及ぼすことが見出された。

第３章は、子どもの歩行発達に関するより広い環境システムについて検討を進めている。研究４では、育児情報源が子どもの歩行発達に対する母親の意識にどのような影響を与えているかが探られた。結果から、子どもの歩行発達を強く意識せず、歩くことへの働きかけに対して消極的な姿勢の母親は、「幼稚園・保育園の先生」、「きょうだい」といった情報源を重視する傾向があり、逆に早く歩けるようになることを望み、積極的に子どもに働きかける母親は、「両親」、「育児書」、「育児雑誌」といった情報源を重視する傾向のあることが明らかにされた。さらに、乳児の歩行発達に関わる育児用具として子ども用歩行器を取り上げ、その歴史や価値の変遷を捉えたうえで、現代における歩行器の利用について事故の可能性や発達への影響との関連で考察が行われた。

そして最後に第４章では、これまでの研究を総括し、展望を述べている。「つかまり歩き」という現象を取り上げることは、成熟要因を踏まえながら、環境の影響を吟味することにつながり、「遺伝か環境か」という発達心理学研究の基本的なパラダイムに新たな視点を提示できるという大きな可能性をもっている。

また、本研究では、歩行発達を取り巻く環境の一つとして養育者が取り上げられているが、養育者の役割は、子どもの歩行を直接引き出そうとする働きかけだけでなく、家庭のなかでのモノ環境を構成することで、つかまり歩きの機会を与えたり、あるいは、

子どもにとっては危険な事故の可能性を減じている。このように考えると、歩行発達におけるヒト環境とモノ環境は密接に関連しており、発達における両者の関係性のあり方を考えるという発達研究の新たな切り口を提示している。現代育児のありようを見直し、養育者が子どもの発達にどのような態度で接すのがより良い関係性につながるか、実証的な研究に基づいて、こうした提言を行うための手掛かりを得たことには大きな意義がある。

（ｃ）評価

本研究は、歩行発達研究の流れを精査してレビューし、これまでの研究の軌跡とそこにおける問題点を正しく指摘するとともに、それにもとづいて物的・人的環境と歩行の関連に注目し、「つかまり歩き」という切り口から具体的にアプローチして独自の成果をおさめており、その独創性と緻密な論理構成には極めて高い評価が与えられる。歩行発達はモノとの相互作用を含めた関係的な現象として捉えることができるが、そのモノは家庭において親が配備し、また親自身の身体的働きかけすらも子どもの独り歩きの獲得を導くものであるという意味においてまさに「ヒト-モノ」システムの産物であり、本研究はそのような領域横断的・学際的な視点に貫かれている。また、歩行発達を取り巻く関係性は、育児情報源への選好によって影響され、歩行に関わる育児用具の考察から、育児観の変遷と合わせて歩行発達の文化・時代的な位置づけにも考察の目が向けられ、スケールの大きな歩行発達論として結実している。今後「歩行」の発達という領域から踏み出して、発達全体の中における歩行の位置づけという方向に進展することを予感させる研究であるといえる。

以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）にふさわしい研究であると判断する。

４．白神　敬介氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士（人間科学）（大阪大学）	根ヶ山光一
審査員	早稲田大学	元教授	工学博士（東京大学）	戸川　達男
審査員	早稲田大学	教授	Ed.D.　（ボストン大学）	竹中　晃二